跡見学園女子大学文学部紀要　第 49 号　2014

現代日本の青年期女子における道徳に関する意識構造

――沖縄県と他県との比較調査研究（1）善の因子構造――

キーワード：道徳性、当為性、領域判断

A Study on the Sense of Morality in Japan: Difference of judgment in Okinawa and other prefectures (1) good deeds

阿部　洋子

Yohko Abe

要　旨

沖縄県（平成 24 年 11 月実施、53 名、女子）、埼玉県・神奈川県（以下、他県と記す：平成 21 年 11 月実施、152 名、女子）での「道徳性に関する意識調査（善）」の因子構造の結果を比較したところ、いくつかの異なる結果が認められた。

沖縄県では、高齢者へのいたわり行動が、日常行動として自然に実施され、挨拶や敬語の使用が「関係性を維持する潤滑油」として捉えられていることが示唆された。ところが、他県では、感謝の言葉の使用や、親孝行や、高齢者へのいたわり行動は、法律の遵守と同じ因子に組み込まれており、法律やルールのような外枠の規制が存在するから、挨拶などの言葉を使用し、親孝行をし、高齢者へのいたわり行動を行うが、規制が存在しなければ、実行しなくても構わないという意識構造が形成されていることが示唆された。

また、沖縄県では、家族が粒子化していないといわれているが、それは家族と先祖が繋がっているという意識構造が濃厚であることと関係することが示唆された。

更に、沖縄県では日本人や世界の人々、故郷、日本の国を大切にする思いが、夢や自然という大きな枠組みの中で捉えられているが、他県の結果では、自然を大切にするということは重要だと感じてはいるものの、実際、自然保護をすることは困難で、現実味がないと感じているようである。

ところで、沖縄県では、我慢することが法律などの規制があるからやむを得ず従うという諦めの意識構造が見られる。これは米軍基地の存在という沖縄県独特の状況によるのかもしれない。他県では、人類愛・愛国心が同じ因子として抽出されており、これは人間や国を愛すること・大切にすることと、自然を大切にすることが異なるものとして意識されているということが示唆された。これは大都市という環境の中で生活していることがこうした意識構造を形成するのかもしれない。

はじめに

子どもたちの道徳心は、家庭での躾、学校での道徳の授業、地域社会での関係性のあり方などによって育成されていくものであろう。しかし現代の日本の青少年を取り巻く環境は、その機能を果たすことができているのだろうか。これまで実施した調査から、現代日本における青年の道徳構造の特徴を、善悪の程度、善悪の重要性、領域判断（道徳・社会的慣習・個人の自由）、当為性（するべきか、する必要がないか、すべきでないか）、善なる行為の実行の程度について検討を行ってきた（阿部：1996～2013 年）。そこで今回は、それらの結果と沖縄県というエイサーやハーリなど先祖供養にまつわる年中行事が大切にされてはいるものの、第二次世界大戦後長期間、アメリカの占領下にあった地域と、他県との結果を比較することで、道徳と祖先崇拝、家族関係、人間関係、ルールの在り方の特徴を検討したいと考えた。なお、沖縄県での調査では男子の調査対象者が 18 名と少なかったため、因子構造を比較検討するに至らなかったため、女子 53 名のデータを用いることにした。また紙数の関係上、今回は調査結果の内、「善」に関する結果のみを報告することにした。

方法

調査用紙と方法：独自に作成した、道徳性（善悪）に関する質問項目に対して、その程度（0～10 点）、当為性（すべきか、すべきでないか）、判断領域（道徳・社会的慣習・個人の自由）などについて、留置法によって回答を求めた。調査対象者：沖縄県（平成 24 年 11 月実施、53 名、女子）、埼玉県・神奈川県（以下、他県と記す：平成 21 年 11 月実施、152 名、女子）。

結果（沖縄県：Table1, 他県：Table2）

道徳性尺度（善の程度）：沖縄県と埼玉県・神奈川県で実施した調査結果を因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した結果、スクリー法により、それぞれ４因子が抽出された。しかし因子構造は異なるものが得られた。

沖縄県では、第１因子（因子寄与率　51.93%）においては、①挨拶・感謝・敬語に関する言葉の使用、②弱者・高齢者へのいたわり行動、③校則を守る、などが組み込まれた。ところが他県では、第１因子（因子寄与率 36.94%）は、①挨拶・感謝・敬語に関する言葉の使用、②弱者・高齢者へのいたわり行動、親孝行、③法律・社会のルールの遵守、校則を守るなどが組み込まれた。このように、他県では、感謝や敬語などの言葉がけ、弱者・高齢者へのいたわり・尊重に「ルール遵守」が組み込

まれており、感謝の言葉がけや高齢者へのいたわりの実施が、ルールの１つとして捉えられていた。ところが、沖縄県では、挨拶・感謝・敬語など「言葉がけの尊重」、「弱者・高齢者へのいたわり」の実施は第１因子として抽出されたが「ルール遵守」は第４因子に分かれて抽出された。

沖縄県では、第２因子（因子寄与率　6.16%）においては、①人類、国家、自分の夢を大切にする、②自然を大切にする、③太陽に手を合わせるなどが組み込まれた。ところが他県では、第２因子（因子寄与率　7.66%）は、①先祖・年中行事の尊重、②我慢する、③神仏や太陽に手を合わせるなどが組み込まれた。即ち、他県では、先祖供養や年中行事の尊重であり、沖縄県では「夢や自然を尊重する」ことと共に、「日本人・世界中の人間、故郷・日本の国を大切にする」ことが組み込まれた。

沖縄県では、第３因子（因子寄与率　5.61%）においては、①先祖・年中行事、②家族揃っての食事、親孝行などが組み込まれた。ところが他県では第３因子（因子寄与率　6.04%）は、①夢の尊重、②自然を大切にするなどが組み込まれた。このように他県では夢や自然を尊重する項目であったが、沖縄県では先祖供養や年中行事の尊重と共に、家族で食卓を囲むこと、親孝行などが組み込まれた。

沖縄県では、第４因子（因子寄与率　3.54%）においては、①法律、社会のルールを守る、②我慢する、③神仏に手を合わせるなどが組み込まれた。ところが他県では第４因子（因子寄与率　4.46%）では、①人類、国家を大切にするが組み込まれた。このように他県では日本人、世界の人々、故郷・日本の国を大切にすることであったが、沖縄県ではルール遵守と共に携帯電話使用などの公衆道徳、神仏に手を合わせるなどが組み込まれた。

紙面の都合上、道徳性尺度（善）の当為性、領域判断、重要性、実行の程度、および道徳性尺度（悪）のすべての結果は、次回、報告することにした。

考察

（１）沖縄県では、挨拶・感謝・敬語に関する言葉の使用、高齢者へのいたわり行動がまとまって１つの因子として抽出されており、挨拶や感謝の言葉掛けが、高齢者へのいたわり行動と同じ次元で捉えられているということであろう。即ち、沖縄県では高齢者への対応が、日常行動として自然に実施され、挨拶や敬語の使用が、「関係性を維持する潤滑油」として捉えられていることであろう。ところが、他県では、感謝の言葉の使用や、親孝行や、高齢者へのいたわり行動は、法律の遵守と同じ因子に組み込まれており、法律やルールのような規制が存在するから、挨拶などの言葉を使用し、親

孝行をし、高齢者へのいたわり行動を行うが、規制が存在しなければ、実行しなくても構わないという意識構造が形成されているのかもしれない。

（２）先祖供養や年中行事の尊重については、他県では家族関係の尊重とは独立した因子として抽出されたが、沖縄県では、同じ因子として抽出された。即ち、家族が食卓を囲むことや先祖供養、墓参、年中行事などを通して繋がりを持っており、それ故、家族が粒子化していないということなのかもしれない。このことは家族と先祖が繋がっているという意識構造が濃厚であるか、希薄であるかということが、家族の絆を強くすることと関係することを示唆するものだと思われる。

（３）他県では夢や自然の尊重は独立した因子として抽出されたが、沖縄県では日本人や世界の人々、故郷、日本の国を大切にする思いが、夢や自然という大きな枠組みの中で捉えられているようである。他県の結果で、現代日本の若者は、夢を持つことは大切ではあるが、実現可能性は低いと感じているという結果と符合しており、自然を大切にするということは大切だと感じてはいるものの、実際、自然保護をすることは困難で、現実味がないと感じているということなのかもしれない。

（４）沖縄県では法律の他に、公衆道徳、神仏に手を合わせること、人間関係を大切にするために我慢することが、同じ因子として抽出された。このことは、畏敬の念の対象として、神仏と先祖と自然は異なるものとして捉えられていることなのかもしれない。また我慢することが法律などの規制があるからやむを得ず従うという諦めの意識が見られる。これは米軍基地の存在という沖縄県独特の状況によるのかもしれない。他県では弱者・高齢者へのいたわり行動がルールの１つとして捉えられていることとは大きく異なる意識構造である。また他県では、人類愛・愛国心が同じ因子として抽出されており、これは人間や国を愛することや、大切にすることと、自然を大切にすることが異なるものとして意識されているということであろう。これは大都市という環境の中で生活していることがこうした意識構造を形成するのかもしれない。

参考文献

阿部洋子　1996　道徳性尺度作成の試み――予備的研究――　日本女子大学紀要　人間社会学部　第 6 号

阿部洋子　1998　道徳性尺度作成の試み――予備的研究(3)――　日本女子大学紀要　人間社会学部　第 8 号

阿部洋子　2005　現代日本人における「道徳性」に関する意識構造の心理学的解明の試論――「道徳性尺度」作成のための予備的調査(2)――　跡見学園女子大学文学部紀要　第 38 号

阿部洋子　2007　現代日本人の青年期における善悪に関する意識構造と道徳領域判断　跡見学園女子大学文学部紀要　第 40 号

阿部洋子　2009　現代日本人の青年期の男女における善悪に関する意識構造と道徳領域判断(1)「悪さ」について　跡見学園女子大学文学部紀要　第 42 号(2)

阿部洋子　2010　現代日本人の青年期の男女における善悪に関する意識構造と道徳領域判断(2)「善さ」について　跡見学園女子大学文学部紀要　第 44 号

阿部洋子　2011　現代日本人の青年期の男女における善悪に関する意識構造と道徳領域判断(3)善悪の評価の違いについて　跡見学園女子大学文学部紀要　第 46 号

阿部洋子　2012　現代日本人の青年期の男女における善悪に関する意識構造と道徳領域判断(4)「善さ」の行動化　跡見学園女子大学文学部紀要　第 47 号

文部省　1988　小学校指導書　道徳編

文部省　1988　中学校指導書　道徳編

Smetana,J.G.,Bridgeman,D.L. & Turiel,E. 1983 Differntial of domains and prosocial behavior. In D.L.Bridgeman(Ed.), The nature of prosocial development; Interdisciplinary theories and strategies.(pp.163-183) New York; Academic Press.

Turiel,E. 1978 The development of concepts of social structure: Social convention In Glick,J. & Clark-Stewart,K.A.(Eds.), The Development of social understanding.(pp.25-107). New York; Gardner Press.

Turiel,E. 1983 The development of social knowledge: Morality and convention: Cambridge. England: Cambridge Press.

Table1　沖縄県「善さ」の程度の因子構造（女子：53名）
【主因子法（プロマックス回転）】

項目No.	質問項目	第1因子 挨拶、感謝、敬語などの言葉がけの尊重、弱者・高齢者へのいたわり・尊重、校則を守る	第2因子 日本人・世界中の人間、故郷・日本の国、夢を大切にする、自然を大切にする、太陽に手を合わせる	第3因子 家族、先祖、年中行事の尊重、親孝行	第4因子 法律、社会のルールの遵守、我慢する、神仏に手を合わせる	平均	SD
1	他人に対して、「ありがとう」など、感謝のことばを言う。	**0.835**	0.110	−0.054	−0.120	9.302	1.030
2	家族の人に対して、「ありがとう」など、感謝のことばを言う。	**0.791**	0.101	0.044	−0.113	9.094	1.148
7	乗り物の中で、障害のある人、怪我（けが）をしている人に席をゆずる。	**0.720**	−0.004	0.188	0.100	8.717	1.364
3	近所の人に挨拶をする。	**0.615**	−0.100	**0.465**	−0.086	8.038	1.581
4	学校の先生に挨拶をする。	**0.602**	−0.031	0.163	0.127	7.868	1.606
5	年上の人に対して敬語（相手を敬った言葉遣い）を使う。	**0.570**	−0.195	0.028	**0.561**	8.453	1.749
24	夢や目標を実現させるために、努力や辛抱をする。	**0.529**	**0.339**	−0.062	0.050	8.302	1.671
10	小学生・中学生が校則を守る。	**0.489**	0.115	0.109	**0.330**	7.132	1.912
6	乗り物の中で、お年寄りに席をゆずる。	**0.447**	−0.096	0.156	**0.428**	8.226	1.577
22	日本人を愛する。大切に思う。	0.226	**0.767**	0.176	−0.139	6.774	2.462
20	日本の国を愛する。大切に思う。	−0.109	**0.732**	0.176	0.037	5.660	2.752
23	世界中の人を愛する。大切に思う。	**0.331**	**0.639**	−0.071	−0.096	7.245	2.369
25	夢や目標を持つ。	**0.427**	**0.585**	−0.105	0.141	8.415	1.512
19	太陽に手を合わせる。	−0.255	**0.551**	0.010	**0.349**	3.019	2.649
26	自然を大切にする。	**0.447**	**0.493**	−0.060	0.112	8.491	1.449
27	自然と調和した生き方をする。	**0.349**	**0.453**	−0.014	0.002	7.642	1.820
21	自分の故郷を愛する。大切に思う。	**0.312**	**0.359**	0.234	0.161	7.623	2.123
16	先祖のお墓参りに行く。	0.156	−0.023	**0.819**	0.099	7.623	1.873
14	家族揃って、食事をする。	0.058	0.110	**0.800**	−0.029	7.415	2.274
17	自分の先祖を大切に思う。	0.169	−0.015	**0.765**	0.021	7.528	2.136
13	年中行事（正月・お盆・お節句・お月見など）を大切にする。	0.073	0.086	**0.563**	0.267	7.340	2.121
15	親孝行する。	**0.323**	0.208	**0.524**	−0.039	8.377	1.608
11	社会のルールを守る。	0.266	0.080	−0.102	**0.704**	7.943	1.657
12	法律を守る。	0.158	0.035	−0.037	**0.676**	8.491	1.540
8	人間関係を大切にするために、自分の言いたいことを我慢する。	−0.177	0.066	0.091	**0.584**	5.245	1.989
9	乗り物の中で、携帯電話で声を出して話をしない〔緊急事態や、自分１人しか乗っていない場合は除く〕。	**0.331**	−0.006	0.177	**0.490**	6.849	1.945
18	神仏に手を合わせる。	**−0.349**	**0.321**	**0.420**	**0.430**	5.679	2.953
相関行列	第1因子	1.000					
	第2因子	0.425	1.000				
	第3因子	0.537	0.498	1.000			
	第4因子	0.487	0.374	0.578	1.000		
	固有値	14.021	1.662	1.516	0.955		
	寄与率	51.931%	6.156%	5.615%	3.536%		
	累積寄与率	51.931%	58.087%	63.702%	67.238%		

Table2　埼玉県・神奈川県 「善さ」の程度の因子構造（女子：152名）
【主因子法（プロマックス回転）】

項目No.	質問項目	第1因子 法律、社会のルールの遵守、校則を守る、挨拶、感謝、敬語などの言葉がけの尊重、弱者・高齢者へのいたわり・尊重、親孝行	第2因子 家族、先祖、年中行事の尊重、我慢する、神仏や太陽に手を合わせる	第3因子 夢や自然を大切にする、家族揃っての食事	第4因子 日本人・世界中の人間、故郷・日本の国を大切に思う	平均	SD
11	社会のルールを守る。	**0.863**	−0.137	−0.084	0.195	8.086	1.709
12	法律を守る。	**0.821**	−0.079	−0.249	0.187	8.382	1.781
5	年上の人に対して敬語（相手を敬った言葉遣い）を使う。	**0.637**	0.181	0.060	−0.082	8.020	1.541
10	小学生・中学生が校則を守る。	**0.608**	−0.051	−0.021	0.263	7.151	1.993
9	乗り物の中で、携帯電話で声を出して話をしない〔緊急事態や、自分１人しか乗っていない場合は除く〕。	**0.573**	0.245	0.091	−0.163	7.447	1.773
2	家族の人に対して、「ありがとう」など、感謝のことばを言う。	**0.561**	**0.306**	0.092	−0.120	8.651	1.411
6	乗り物の中で、お年寄りに席をゆずる。	**0.556**	−0.126	−0.041	**0.413**	7.862	1.821
1	他人に対して、「ありがとう」など、感謝のことばを言う。	**0.548**	0.124	0.278	−0.203	8.993	1.097
7	乗り物の中で、障害のある人、怪我（けが）をしている人に席をゆずる。	**0.492**	−0.052	0.163	0.175	8.717	1.364
4	学校の先生に挨拶をする。	**0.488**	0.103	0.262	−0.052	7.678	1.584
3	近所の人に挨拶をする。	**0.399**	0.248	0.286	−0.109	7.691	1.536
15	親孝行する。	**0.339**	0.145	0.258	0.131	8.138	1.655
18	神仏に手を合わせる。	0.025	**0.900**	−0.211	0.058	5.599	2.725
17	自分の先祖を大切に思う。	0.004	**0.748**	0.068	0.205	6.908	2.309
16	先祖のお墓参りに行く。	0.028	**0.747**	0.032	0.200	7.158	2.125
19	太陽に手を合わせる。	−0.071	**0.574**	0.005	0.169	3.355	2.706
13	年中行事（正月・お盆・お節句・お月見など）を大切にする。	0.214	**0.349**	−0.046	0.294	6.349	2.511
8	人間関係を大切にするために、自分の言いたいことを我慢する。	0.151	**0.267**	−0.028	0.010	5.467	1.929
25	夢や目標を持つ。	−0.043	0.026	**0.799**	−0.016	8.112	1.711
26	自然を大切にする。	0.078	−0.217	**0.788**	0.125	8.461	1.468
24	夢や目標を実現させるために、努力や辛抱をする。	−0.019	0.049	**0.702**	0.066	7.974	1.678
27	自然と調和した生き方をする。	−0.002	−0.075	**0.579**	0.296	7.586	1.801
14	家族揃って、食事をする。	0.061	0.003	**0.494**	0.121	7.039	2.149
22	日本人を愛する。大切に思う。	0.014	0.277	0.082	**0.704**	6.072	2.306
23	世界中の人を愛する。大切に思う。	−0.075	0.008	**0.425**	**0.678**	6.737	2.273
21	自分の故郷を愛する。大切に思う。	0.044	**0.351**	0.093	**0.598**	6.395	2.297
20	日本の国を愛する。大切に思う。	0.008	**0.395**	−0.021	**0.567**	5.447	2.567
相関行列	第1因子	1.000					
	第2因子	0.456	1.000				
	第3因子	0.420	0.474	1.000			
	第4因子	0.267	0.296	0.291	1.000		
	固有値	9.973	2.068	1.630	1.205		
	寄与率	36.937%	7.660%	6.038%	4.463%		
	累積寄与率	36.937%	44.597%	50.635%	55.099%		

跡見学園女子大学文学部紀要　第 49 号　2014

ジークフリート － その愛と死

－　日本の視点から　－（２）

Siegfrieds Liebe und Tod – unter einem japanischen Gesichtspunkt

金成　陽一

KANARI Yoichi

騙し打ちの系譜

ここでは日本とヨーロッパの謀殺や暗殺、騙し打ちの歴史について見ていこう。その切っ掛けとなるのは恨みや妬み、あるいは誤った正義感等である一方、別なレベルで、ある種の人間の権力欲や、特定の物や人を我がものとしようとする独占欲等々、凄さまじい欲望の歴史といってもいいかもしれない。

ジークフリートも信頼していた人々の裏切りによって、いともあっけなく殺されてしまった。いかな英雄とはいえ、気を許していた相手によって突然しかも背後から襲われたのでは、ひとたまりもなかっただろう。彼を亡きものとするためには、国王グンテルさえハゲネ同様にしたたかであった。槍で射抜かれる瞬間まで、ジークフリートは彼らの友情を露ほども疑ってはいなかったのである。

グンテル王はまず、「かつてジークフリートによって征服されたザクセンの王リウデゲールの軍隊が再びブルグントに攻めよせて来た」と彼を欺いた。ジークフリートは当然の如くグンテルに「私が必死に食いとめて、あなたの名誉を保ち、今度もあの連中を前と同じ目にあわせてやりましょう」(885)[(1)] と約束する。これこそが巧妙な罠の始まりであったことなど、一本気で血気盛んなジークフリートにわかるはずもなかった。彼はどこまでも単純素朴で、哲学的思考などまるで無縁な男なのであった。

一方ハゲネは王妃クリエムヒルトを巧みに騙し、ジークフリートの急所にあたる衣装の上に「目立たない十字の印を縫いつけ」させていたのだ。彼はその印を確認するとすぐに、「リウデゲールの軍は攻めてくるのを中止したそうだ」とジークフリートに告げさせたのである。肩すかしを食って出陣のパワーを持て余した彼らが、グンテル王の勧めるまま「熊や猪を狩に出かけ」(912)て行くことになったのも自然な成り行きであった。肉を主食としている民族は昔から多血質になり易く、戦や格闘技等のスポーツで身体を動かさないことにはエネルギーの発散場所もなかったのである。狩猟も、こうした男たちのエネルギーを発散するための一つの手段であったといえる。

ここでもハゲネは「誰が一番の腕達者であるか競争しよう」と言い出して、ますますジークフリート

を煽っている。

「みなみな、我こそはこの狩において

賞を獲得しようと思ったのだが、強剛なるジーフリトが

炉辺に姿をあらわすにおよんで、そうはいかなくなった」(942)

しかし、動き回った男たちがのどの渇きを覚えた時、酒をはじめとする飲み物は一切なかった。これこそがハゲネの計略で、彼は「今日の狩の場所を間違えて、別の処へ飲物を運ばせてしまった」と弁解し、更に、「この近所に冷たい泉の湧いているところを知っています。そこへまいりましょう」と続けたのだ。泉に来ると、ジークフリートは礼儀正しく、国王の飲むまでは決して水を飲もうとはしなかった。次に彼が泉の上にかがんで水を飲んでいた時、ハゲネは弓も剣も全て運び去った上で、その背後から衣装の十字の印を槍で貫いたのである。

「クリエムヒルトの夫は草花のなかへ倒れ

傷口からは激しく血潮がながれ出した」(988)

深手を負ったジークフリートは手元にあった楯をハゲネにぶつけたものの、何の甲斐もなかった。ジークフリートが死んだ後、ハゲネは言う。

「プリュンヒルト様の心を曇らせた婦人に

事の由が知れたとて、かまうことではない。

どんなにあの婦人が泣き悲しんでも、わしの関する所ではない」(1001)

この科白を聞く限り、ハゲネの行動は決してジークフリートに対する個人的な恨みなどではなく、あくまでも主君の奥方に対する屈辱を晴らさんがためであったとも思える。しかし、「騙す者より、騙される者が悪い」という古代ならまだしも、信義が重んじられた騎士の時代に、こうした騙し打ちは如何なる理由があろうとも、やはり卑怯なやり方である。

ジークフリートの亡骸はハゲネによって、残酷にもクリエムヒルトの寝室の前へと運ばれる。侍臣の知らせで、夫の死体と対面した彼女は「そのまま床にくずおれて言葉も出ず、心の痛手のためその口からは血が迸った」、そして「プリュンヒルトが企んで、ハゲネのした仕業です。きっとこの殺害の復讐をしよう」(1012)という彼女のこの誓いによって、まさに血で血を洗う凄まじい争いが繰り広げられることになっていく。その後、亡骸が大伽藍に運ばれると、グンテル王とハゲネも家来たちと共にやって来たのだ。テキストはこの場面で、次のように述べている。

「これはまことに不思議なことであるが、

今でも度々その例が見られる。殺人の下手人が死骸のそばへ寄ると、

傷口からまた血が流れ出るのである。この場合にも同じ事が起こり、

殺人の罪はハゲネにあることが分明となったのだ。」(1044)

ジークフリートの傷口は、殺害時のように盛んに血を噴き出したのであった。ヨーロッパ中世にお

いて、こうしたことが真しやかに信じられていた時期はかなり長かったようだ。神の公正な判断がこのような現象を引き起こすのだと人々は考えていたのだろう。シェイクスピアが 16 世紀後半に書いた「リチャード三世」にも同じような場面が見られる。リチャードに殺された夫の死体を前にしたアン夫人は、彼に向って言うのだ。

「ああみんな、見て見て！　ヘンリ王の血のこびりついた傷が口をあいて鮮血が迸る。
恥じるがいい、邪悪な醜い肉のかたまり、お前が現れてからだ、一滴の血も残っていない冷たい空の血管からこの血が吹き出して来たのは。
無理無残なお前の仕打ちがこの無残な血の洪水を呼んだのだわ。[(2)]」

ところで、リチャード三世の遺骨が 2012 年 8 月にレスター市中心部の駐車場から発見されたというニュースは、世界を驚かせた。公表された写真を見ると、湾曲した背骨はシェイクスピアの描いた通りだが、復元された顔からは極悪人というよりは、むしろ思いやりや気品が漲っているということだ。

さて、西洋そして日本の英雄たちがどのように騙し打ちにあったのか、いくつかのエピソードを追ってみよう。

聖書

旧約聖書「士師記」に登場するサムソンも悲劇的勇者の一人である。彼はペリシテ人と何度も戦ってこれを破っていたのだが、敵が送ったデリラという女を愛してしまう。権力や重要な秘密を握っている男を美しい女スパイで誑し込むのは、大昔から現代まで続いている普遍の手口だろう。デリラに自分の大力の秘密がどこにあるのかを聞かれたサムソンは、三度嘘をついて彼女を欺いたけれど、しかしそれでも尚、デリラは執拗に彼に迫ったのである。

そこで女はサムソンに言った、「あなたの心がわたしを離れているのに、どうして『おまえを愛する』と言うことができますか。あなたはすでに三度もわたしを欺き、あなたの大力がどこにあるかをわたしに告げませんでした」。女は毎日その言葉をもって彼に迫り促したので、彼の魂は死ぬばかりに苦しんだ [(3)]。

心底愛してしまった女と祖国との間で苦悩するサムソンの心情が、痛いほど伝わって来る。彼はついに「髪を剃り落とされると自分の力は去って弱くなり、他の人のようになるでしょう」とデリラに打ち明けてしまったのだ。気に恐ろしきは妖艶なる美女の魔力と言うべきか。このような女の魔手にか

かっては、如何な勇士であってもまるで形無しである。サムソンは眠っている間に彼女に髪の毛を剃られ、敵に両目を抉られて獄屋に繋がれてしまった。だが、その後、髪は徐々に伸びて怪力を取り戻した彼は、繋がれていた競技場の大黒柱を外し、屋根の上にいた三千人のペリシテ人を道連れに壮絶な最期を遂げたのである。別なレベルでは、剃られたのは陰毛で、彼が去勢されたことを示している。そして、私にはこちらの方が十分に有りそうなことに思える。

やはり悲劇の英雄の一人と私が思っているのは、「サムエル記下」に少しだけ登場してくるウリヤである。彼自身には何の落ち度もないというのに、妻バテシバがあまりにも「いい女」であったばかりにダビデ王に目をつけられ、彼は危険な前線へと送られてしまったのだ。ダビデがある夕暮れ、屋上から美しいバテシバが沐浴しているのを見てしまう個所はなかなかにエロチックで、昔から多くの絵描きたちの心を刺激してきた。ヨーロッパの美術館を巡れば、どこでもこのシーンが描かれた絵画の一、二枚にはお目にかかれるだろう。

ダビデ王はウリヤを呼び、「家に帰って良い」と言うのだが、彼は「わたしの主人ヨアブと、わが主君の家来たちが野のおもてに陣を取っているのに、わたしはどうして家に帰って食いのみし、妻とねることができるでしょう」と答える。そこで王は彼を招いて自分の前で食い飲みさせ、彼を酔わせた。それでもウリヤは夕暮れになると「出ていって、その床に、主君の家来たちと共に寝た。そして自分の家には下って行かなかった[(4)]」。この一文を読むだけでも、ウリヤの誠実さと忠義ぶりがわかろうというものだ。しかしダビデ王は麗しき彼の妻を自分のものとするために、この何の咎もない勇敢な夫を亡きものとすべく、彼の上官ヨアブに「ウリヤを最前線へ送れ」と命じたのである。王の手紙には次のように書かれていた。「あなたがたはウリヤを激しい戦の最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」。そしてダビデの目論見通り、ウリヤは戦の一番激しい場所に送られて戦死してしまう。聖書はこの章の最後に「ダビデがしたこの事は主を怒らせた[(5)]」と述べている。

ギリシャ神話

古代マケドニアのアレキサンダー大王が、最も尊敬していた英雄はアキレスであった。トロイア戦争で親友のパトロクロスを敵将ヘクトールに殺された彼は、激しい憎悪に燃えてヘクトールを追い詰め復讐を果たしたのだったが、しかしヘクトールは死ぬ前に「アキレス自身の死も近いぞ」と予言していたのである。

「まったくおまえの胸のうちにある心臓は、鋼鉄でできているのだろう。それならよくよく気をつけるがいい。神々のお憤りを、私のせいで蒙らないようにな。パリスとポイボス・アポローンとが、

いつかおまえを、たとえどんなに強い武士だろうと、スカイアの門のところで、打ち取ろうという、その日に [6]」

神話によれば、そもそもヘクトールはアキレスと戦う前、既にゼウスとアポローンに見捨てられていたのだ。アテーナーにいたっては、(パリスの)弟デーイポポスの姿を借りてヘクトールに近寄り、「力をあわせてアキレスに当たろう」と偽って彼を誘ってさえいる。「ヘクトールは勇気を得てアキレウスに向き直った、まずアキレウスが投げた槍を、ヘクトールは身を捩じって危うく避け、すかさず自分も投げ返した。しかし同じく失敗に帰した。ヘクトールは第二の槍を借りようとして、弟の名を呼びながら後ろを振り向いた。しかしそこに、誰の影もなかった。彼は誑かされたのを知って愕然としたが、せめて自分の最期には、後の世にも恥じぬように立派に戦おうと、腰の長剣を抜いて跳びかかっていった、あたかも鷹が、高空から群雲を貫いて、地上の獲物に襲いかかるように。[7] 」

親友を亡くしたアキレスの怒りと悲しみは収まらなかったのである。アキレスはヘクトールの遺体の踵に穴をあけて革紐を通し、戦車の後ろに括りつけて砂塵をあげて戦場を引き摺り回した。

アキレスの身体が不死身となったのは、息子を熱愛していた母親テティスが彼を冥府の川ステュクスに浸したからである。しかし母の指がその時、息子の踵を持っていたのでここだけが水に浸らず、不死の力が授からなかった。ヘクトールの弟パリスがアキレスを殺すことができたのは、この踵を矢で狙ったからである。アレキサンドリア時代からの異伝によれば、トロイアの王女ポリュクセネーの美に打たれたアキレスが深い恋心を抱き、彼女と密会したところを、「詐謀によってパリスに射たれた [8]」という。強い人間にもある弱点を「アキレスの踵」というのはよく知られた故事である。勇士ジークフリートの弱点も、まさしくこのアキレスの踵によく似ている。

アキレスの遺体は火葬に付され、パトロクロスの遺骨と混ぜられて海を臨む墓に納められたという。パトロクロスは何とも素晴らしい友人を持っていたものである。因果応報とはよく言ったもので、パトロクロスを殺したヘクトールはアキレスに殺され、アキレスもヘクトールの弟パリスに殺されていく。

英雄ヘラクレスの場合は、疑い深い妻のデアネラの思い違いによって殺された。巨人族ギガンテスたちを滅ぼして妻の待つトラキアへ帰ろうとしたヘラクレスは、その時、息子の嫁にしようとした一人の美女と一緒だったのである。ところが、自分が捨てられると勘違いしたデアネラは夫の愛を取り戻そうと、ケンタウロス族のネソスから貰った薬を試してみることにしたのだ。デアネラを奪おうとした怪物ネソスはヘラクレスに弓で射殺された時、「お前の夫はお前に飽きて、他の女を愛するだろう。夫の愛をひきとめたいなら、流れ出ている私の血をまぜたある飲物を飲ませなさい。夫はきっとまたお前の所へ戻って来るよ」と言っていたのである。それを信じたデアネラは、教わった通りの薬にネソスの血を入れて壺の中にしまっておいたのだ。彼女はヘラクレスの所へ持たせてやる晴着をその薬に浸して、使者に持たせたのである。夫がまた自分を愛してくれるはずだと考えて。

「ヘラクレスがその晴着をきたとたんに、ネソスの血にまじっていた毒がたちまち全身にひろがって、火のように彼を焼きこがした。ヘラクレスは必死で晴着をひきはがそうとしたが、布は肉にはりついたままどうしても離れない。川にとびこんでみたが、毒はいよいよ勢いをまして、川じゅうを炎にして燃えさかった。ヘラクレスはまた川からとびだすと、今度は夢中で山の方へ走った。しかし、テッサリアとアイトリアの境のオイタ山のところまできたとき、ついに力つきて仆れてしまった。(9)」

メドゥサを退治したペルセウスについても触れたいところだけれど、この英雄の最期がどうであったかについては残念ながらよくわからない。一説によるとペルセウスはアルゴスに戻った時、王座を奪っていたプロイトスを石に変えて自分が王となったため、プロイトスの息子メガペンテスに殺されたのだという。彼の死を巡っては、この説以外ほとんど残っていない。あるいは、晩年は怪物から救い出したアンドロメダと幸せで平穏な日々を送っていたのかもしれない。二人の長男ペルセス(Perses)は、後に大帝国ペルシャを打ち立て、帝国の名は彼に由来すると言われている一方で、そのような話は単なるごろ合わせのこじつけにすぎないという説もある(10)。

クレタ島の迷宮(ラビュリントス)に入って、牛頭人身の怪物ミノタウロスを退治したのはテ―セウスであった。彼はそのずっと以前、巨大なこん棒で旅人を殴り殺していたペリペテスを同じやり方で殺している。また彼は、折り曲げた二本の松の木に人を縛りつけ手を離しては引き裂いて殺していたシニスも、その松の木を使って殺している。これ以外にもテ―セウスに関しては様々なエピソードが伝えられている。

アテネの詩人たちは、何故かテ―セウスをヘラクレスの親しい友人として描くのを好んでいた。神話には、「テ―セウスが、冥府の女王ペルセポネーに求婚しようとする友人ペイリトオスに同行して冥府に赴いた」とある。冥府の王プルートーンは二人の乱暴を恐れたので二人を騙して、それに坐るともう立てないという忘却の椅子に腰掛けさせてしまった。この状況から二人を救い出したのがヘラクレスである。「彼はヘーラクレースに助けられて地上へ戻って来たが、一般の民衆からも反抗や侮蔑をもって報いられたので、多島海中の一島スキューロスの王リュコメーデースの許に逃れた。しかし王はテ―セウスを恐れてか、メネステウスに買収されてか、彼を裏切って高い岩から突き落とし、殺害したといわれる(11)」。これがアテナイの創始者といわれる偉大な英雄の最期である。

日本

日本史を紐解けば、暗殺、謀殺、裏切り、謀反、騙し打ち等々が数多く出てくる。ここでは特に「日

本書紀」「古事記」を中心に、いくつか古代の出来事を見ていくことにしよう。

まずは「日本書紀」から垂仁天皇の時代である。年表によれば垂仁元年は紀元前２９年で、ちょうどイエス・キリストが生まれた頃と思えばわかり易いかもしれない。この天皇は「立派なお姿で、人とはかけはなれて優れた度量をお持ちになっていた」という。邪馬台国の卑弥呼の墓ではないかとの説もある纒向(まきむく)に珠城宮(たまきのみや)という都が作られたのは、垂仁二年の十月であったと書紀は述べる[12]。皇后(狭穂姫)の兄狭穂彦王(さほひこのみこ)が謀反を企て、皇后に天皇暗殺を勧めるのはそれから二年後の垂仁四年のことだ。「天皇が寝ている時に、短剣で頸を刺して殺せ」と兄に言われた皇后は、夫との板挟みとなって大いに苦しんでいたのだが、それでも、ある日天皇が昼寝をしていた時、「チャンスは今しかない」と考えて決行しようとした。しかし、涙がこぼれて天皇の顔に落ち、目を覚ました天皇は彼女に尋ねたのだ。「私は、いま夢を見た。錦色の小蛇が、私の頸にまつわり、また大雨が狭穂より降ってきて顔を濡らす夢を見たのは、何の前兆なのだろうか[13]」。もう謀を隠しておくことができないと悟った皇后は、兄の計画を全て天皇に打ちあけてしまったのである。天皇は「これはお前の罪ではない」と妻を許そうとするが、彼女は「私は皇后であるといっても、現に兄の王が滅亡してしまっては、何の面目あって天下に臨むことができましょうか」と、兄と共に稲城の中で焼け死んだのであった。稲城(いなき)とは稲を積んで作った城(き)(敵を防ぐため垣を巡らした所)のことで、それは非常に堅固で並大抵の力では決して破ることはできなかったという。

次に「古事記」より、神話時代の英雄ヤマトタケル（倭建命）が父景行天皇に命じられて九州の豪族クマソタケル(熊曾建)兄弟を騙し打ちにする場面である。クマソ征敗を命じられた少年ヲウス(小碓命)はクマソの宴の日を待って、煌びやかに女装すると女たちに紛れてまんまと護りを固めた室の中に坐っていた。「すると、クマソタケル兄弟二人が、その美しいおとめを見初めての、二人の間に座らせて酒を注がせ、さかんに酒杯を重ねておった。そうして、その宴のたけなわの頃を見計らうと、ヲウスは懐に隠しておった短い剣を取りだしたかと思う間もなく、兄のクマソが着ておった衣の襟首をつかむやいなや、手にした剣を胸の真ん中にぐさりと刺し通したのじゃ。それを見た弟のタケルはの、そのあまりの素早さに怖じ気づいて逃げ出してしもうた。ヲウスはすぐさま後を追い、館のきざはしのところで追いついたかと思うと、その背中の皮を引っ掴んでの、剣を尻から刺し通してしもうた[14]」。美女が時によって美しい男のように見えることもあるし、その逆のこともある。美しい男が化粧によって美女に変身しうるのは、歌舞伎の世界だけではないだろう。串刺しにされた弟のクマソタケルはヲウスに「今より後はヤマトタケルの御子と名乗られよ」といって死んだのだった。

同じ「古事記」は、少し時代を経て第 17 代履中天皇（イザホワケ：伊耶本和気王）の世に起きた出来事をリアルに伝えている。

イザホワケの大君が宴の後すっかり酒に酔って寝ていると、弟のスミノエノナカツミコ（墨江之中津王）が大君を殺そうと、御殿に火を放ったのだ。しかし大君は忠臣によって救い出され、当麻を経

て石上神宮へと逃げるのである。そこへイザホワケのもう一人の弟ミズハワケ(水歯別、命)が面会にやって来たのだが、大君はミズハワケもスミノエノナカツミコと同様の心を持っているのではないかと疑って、会うことはしなかった。「そのような邪心はありませぬ」と言うミズハワケに大君は、「それではスミノエノナカツミコを殺して来たなら会うことにしよう」と伝えたのである。そこでミズハワケはスミノエノナカツミコの側近であったソバカリ（曾波加里）という男に近づき、「言うことを聞いてくれれば、自分が大君となった暁には、お前を大臣に取りたててやる」と騙したのだ。その言葉をすっかり信じ込んだソバカリに、ミズハワケは「お前の仕えている御子を殺せ」と命じたのである。ソバカリは命じられたまま、スミノエノナカツミコが厠に入ったのを狙って、戸の外から長い矛で刺し殺してしまった。ミズハワケは約束通りソバカリを自分の重臣として取り立てはしたものの、「一度、自分の主を殺した奴だ。次には俺のことを狙わないともかぎらない」という疑念を抱く。彼は一計を案じて、ソバカリと酒杯で契りの酒を飲むことにしたのである。

「ともに酒を飲み交わす時に、顔をすっぽり隠してしまうほどの大きな椀を持ってこさせての、その椀になみなみと酒を注いだのじゃ。そして、御子がまず椀に口をつけて半ばほど飲むと、その椀をソバカリに渡した。ソバカリが口をつけて残りの酒を飲みほそうとして、ぐっと椀を傾けたので、大きな椀が顔をすっぽり覆ってしもうた。そこをねらってミズハワケは、座っている蓆の下に隠しておいた剣を取り出すとの、隼人ソバカリの首を一太刀で斬り落としてしもうたのじゃった。(15)」

騙すのが悪いのは当たり前とはいっても、こうした場面からは、いとも簡単に騙されてしまう方にも隙があったと思わざるを得ない。相手が卑怯であっても、殺されてしまってからではそれこそ後の祭りで、きれいさっぱりお終いなのである。殺すか殺されるかが繰り返された時代に立派な道徳的観念などがあったとも思えず、この場合やはり悪いのは騙される方なのである。

「古事記」人代編から第 21 代雄略天皇（オホハツセワカタケル：大長谷若建命）を取り上げよう。彼は名前通り雄々しく、政略的にも優れた大王だった。自分の気に入った女は次々に我がものとし、反抗する者たちは悉く皆殺しにする有無を言わせぬ彼の徹底性に、周りの人々は大いに怖れ慄いたに違いない。古来、権力を握る者は自分の強さをこれでもかというほど見せつけなければ、とても人々を服従させることなど出来なかったのだ。怒り易く残酷な反面、実に単純で愛すべき若きオホハツセワカタケルの人柄は、古代における偉大な大王の姿を彷彿とさせるのである。だから、厖大な万葉集の巻頭にオホハツセワカタケル(雄略天皇)による求婚の歌が掲げられているのも、決して理由のないことではない。

籠もよ、み籠持ち、
　掘串もよ、み掘串持ち、この岡に、菜摘ます児。
家告らせ。名告らさね。　　そらみつ　大倭の国は　おしなべて　我こそ居れ。

しきなべて　我こそ坐(ま)せ。　　我こそは　告(の)らめ。　家をも　名をも。

雄略天皇

（籠よ、籠を持ち、堀串[土を掘るくい]よ、堀串を持って、この岡で、菜をお摘みの娘さん、あなたの家は何て言うの？　あなたの名は？　さあ、名告って下さいね。さて、この私はと言うと、この大倭の国は、しっかりと、私が領有しているのさ。はっきり取り仕切って、私が治めているのさ。私の家も名も、ざっとこう名告っておこうよ[16]）

安康元年(454 年)二月、安康天皇は家臣ネノオミ（根臣）の讒言を信じ込んでオホクサカ(大日下王)を殺し、その妻であったナガタノオホイラツメ(長田大郎女)を奪い取って自分の妻とした。ある時、天皇は彼女に「気になっていることが一つある」と打ち明ける。「そなたとオホクサカの子であるマヨワ(目弱王)が大きくなって、父を殺したのが我と知ったなら、邪心を抱くのではないか」。しかし偶然にも床下で遊んでいたマヨワはこの話をすっかり聞いて、その後、天皇の寝ている時を窺って、その首を打ち落としてしまったのである。

これを知った安康天皇の年の離れた実の弟オホハツセワカタケル（雄略天皇）は、兄クロヒコ(黒日子王)の許に駆けつけて「大君が殺されました。どうすればいいでしょうか」と聞いた。しかし年上のクロヒコは驚きもせず、何をしようともしなかったので、「実の兄が殺されたのに何もせぬとは！」と怒って、「その兄の襟首を掴んで外に引きずり出しての、太刀を抜くやいなや、兄のクロヒコを斬り殺してしもうた[17]」

そしてその後に訪ねたもう一人の兄シロヒコ(白日子王)も同じ態度であったから、「それでまた、すぐさまシロヒコの襟首を掴んで引きずってきて、小治田(おわりだ)まで連れてきての、そこに穴を掘ると、生きたまま埋め立ててしもうたので、シロヒコは恐ろしさのあまり、腰のあたりまで土に埋められた時に、二つの目の玉が飛び出してしもうての、そのまま死んでしもうたのじゃ。[18]」

この描写を見るだけでも、若き日の雄略天皇がいかに激しやすく雄々しい男であったかがわかるだろう。その後、家臣のツブラノオホミ宅へ逃げ込んだマヨワは、オホハツセワカタケル(雄略天皇)に追い詰められ焼き殺されている。

同じ年、オホハツセワカタケルは安康天皇がかつて市辺押磐皇子(いちのべのおしわのみこ)に皇位を伝えようと思っていたことを恨み、皇子を巻狩に連れ出して暗殺している。巻狩とは狩場を四方から囲んで、獣をその中へ追い込む方法である。「日本書紀」から引用しよう[19]。

「近江の狭狭城山君韓帋(ささきのやまのきみからふくろ)が、『いま近江の来田綿(くたわた)の蚊屋野に、猪や鹿が多くいる。その角が枯樹の枝に似ており、その集まった脚が、灌木のようであり、吐く息が朝露に似ている』と申しておる。できれば、皇子と、十月のあまり風が冷たくないときに、野に遊んで、いささか心をたのしんで馳射(かり)をしようではないか」と仰せられた。市辺押磐皇子は、天皇にしたがって、馳射をした。そのとき、大

泊瀬天皇は、弓を引いて、じっと狙いをつけ、馬を馳せて、偽って大声を出し、「猪がいた」と言われて、市辺押磐皇子を射殺してしまわれた。皇子の帳内(とねり)である佐伯部売輪(さえきべのうるわ)が、皇子の屍を抱いて、息をはずませあわて驚いて、どうしたらよいのか、わからなかった。ころがりまわって、大声を出して、皇子の頭や脚のあたりを行ったり来たりした。天皇は、みな殺してしまわれた。

相手を猟に誘って騙し打ちしたのは、ハゲネがジークフリートを殺したのと同じやり方である。当然ながらいつも武器を手にしている狩猟では、怪しまれることなく容易に狙った相手を殺すことができたのである。

色好みの男ども　ー　「平家物語」とその後のエピソード

権力を握った男が美しい女に目をつけて、なりふり構わず我がものとしてしまうのは何もダビデ王に限った話でもなく、古来から女好きの男たちが繰り返してきたことである。「英雄色を好む」とはよく言ったもので、下々の男どもは一種の羨望と激しい嫉妬を覚えながら陰口を叩いていたのだろう。

保元の乱で源為義は崇徳上皇方となって戦った末に斬られ、平治の乱では源義朝が殺された結果、源氏の勢力は急激に衰退し平家の天下となったのである。それまで続いてきた貴族の無力さと武士の力をまざまざと見せつけた点で、これらの内乱は日本の歴史を大きく転換させた事件といえる。何しろ武士の時代はこれ以降脈々と九百年近くも続いて行くことになるのだから。

だが、「平家物語」は、平家一門が繁栄し世の中が平穏になると思いきや、鳥羽院が亡くなった後に後白河院と息子の二条天皇の仲が険悪になったと伝えている。その「二代の后」の章では二条天皇の傲慢さをさらりと述べているのだが、短くしかも軍記物語の流れには直接関係のある話ではないので、あまり読者の記憶には残らないかもしれない。つまり、若い二条天皇が、当時天下一の美女と噂された故近衛天皇の后(多子)にぞっこん惚れこんでラブレターを送ったものの、全く無視されてしまったということだ。惚れた女に振られた男が恋の炎をますます激しく燃え上がらせたのは当然であった。彼女は二条天皇からすると伯父の妻、つまり伯母と甥の関係であったにもかかわらず、彼は多子の父大炊御門(おおいのみかど)右大臣公能(きんよし)に「后として入内させよ」との宣旨を下したのである。こうした異例のことに驚いた公卿たちが異議を唱えても天皇は強引に押し切って、結局嫌がる彼女を我がものとしてしまったのである。しかし次の「額打論」の章となると、この我儘な二条天皇は重い病にかかって、23 歳の若さで崩御してしまう。その意味ではこれもまた「奢れる者久しからず。ただ春の夜の夢のごとし」の主題に沿った挿話ではあるのだ。

平家全盛の頃でも、もし源義朝の愛妾常盤御前が美しくなかったなら、平清盛だって彼女に興味を

抱かなかっただろうし、ひょっとするとこれだけでも日本の歴史は大きく変わっていたかもしれない。清盛は本来なら義朝を殺した後、常盤と今若、乙若、牛若という三人の子供たちをすぐに抹殺していたはずなのに、常盤の美しさが死をのがれさせたのだから、まさに美女は歴史を動かす力を持っているといえるだろう。しかし、常盤を自分の妾とする代わりに子供たちを助けたこと、更に父忠盛の妻、つまり清盛にとっては継母に当たる慈悲深い池禅尼の懇願にしたがって少年頼朝を殺さなかったことが、後のち清盛の、そして平家滅亡の遠因となっていくのだから皮肉な話である。この後、清盛はすぐに常盤に飽きてしまったらしく、他の男に彼女を渡して再婚させている。彼は存外優しい男であったのかもしれないけれど、その優しさこそが一族崩壊の引き金となったのである。頼朝は決して清盛の轍は踏まず、彼の平家追討は徹底を極めた。その結果、最後の子孫六代が斬られたことにより、平家は完全に息の根を止められたのであった。

この章の最後に、それこそごまんといる女好きの権力者の中から、特に私の記憶に残っている話を引用しておこう。それは武田元明という小大名の哀れな話である。「日本の風景を歩く　近江・大和[20]」には次のように記されている。

「むかし、この湖北の高島郡内にある領地は、大溝にしても、若狭を領する大名の管轄となっていた。近江の北は、つまり、若狭領下にあったのである。丹羽長秀という武将が若狭を領した時、それまで若狭を守ってきた武田元明なる衰運の武将を、山奥の村に幽閉し、そして、海津の宝幢院へ招いて、本堂の前で詰腹を切らせたのである。史実は、武田が明智光秀と通じた罪であったと伝えているが、私が調べたところでは、武田元明は明智光秀と通じて、信長殺しに参加できるような、そんなに元気な武将ではなかった。もとは武田信繁から出て勇将の流れを汲む男だけれども、いってみれば弱将だった。その武田元明を、わざわざ丹羽長秀が海津へよんで殺したというのは、じつは元明の留守中に幽居から美貌の妻を略奪する目的があったのである。しかも、それは背後に羽柴秀吉がいて、猿智恵を働かせたのだった。秀吉が正直者の丹羽をつかって、自ら海津で元明と会い、眼の前で腹を切らせた上で、計画どおり、山をへだてた若狭の元明の妻を強奪して京へつれ帰り、自分の妾にしたのである。その元明の妻というのが、のちの松の丸殿である。武田元明という男は踏んだり蹴ったりの目にあった男で、つくづく哀れに思われてならない。」

謀議

平治の乱（平治元年：1159 年）で、清盛は幽閉されていた後白河法皇を救い出し、源義朝を殺して勝利した。父忠盛が鳥羽天皇に得長寿院を寄進したのに習って、清盛が蓮華王院（三十三間堂）を後白河法皇に寄進したのは長間二年（1164 年）のことだ。清盛の妻二位殿（時子）は後白河法皇の妻建春門

院(滋子)の姉だから、二人は義理の兄弟の関係にあり、当時はまだ大変に親しい間柄であった。しかしその後、急激に勢力を増大させた清盛と平家一門に対して、法皇とその側近たちは警戒心と反発を強めていく。保元の乱以降貴族同士の争いも武士の力なくしては如何ともしがたいとわかってはいても、まだ以前のような貴族政治の再来は可能だと信じていた者が多かったのかもしれない。

安元二年（1176 年）に后建春門院が亡くなり、後白河法皇の清盛に対する穏やかならぬ気持はますます大きくなったのである。「平家物語」前半の一つのハイライト「鹿ケ谷」の謀議は、こうして起こるべくして起こったといえる。引き金は、貴族たちの憧れの地位である左大将につけなかった法皇側近の大納言藤原成親の不満であった。彼は自分の望んでいたその地位を清盛の長男重盛に奪われ、更に右大将にも三男宗盛がついてしまったのだから、その恨みは頂点に達していたはずである。

話はいたって簡単なのだ。成親と仲間たちは時々東山の麓鹿ケ谷にあった俊寛僧都の別荘に集まっては、平家を滅ぼす謀議をしていた。ある時、後白河法皇も側近の浄憲法印を連れてそこに現れる。酒宴の席の皆の話を聞いた浄憲法印が「用心なされ。大勢の人々が聞いていれば、すぐにも平家に漏れて、天下の一大事となりましょう」と注意すると、顔色を変えて立ち上がった成親はその拍子に前にあった瓶子を倒してしまった。

法皇が、「これはなんとしたこと」と仰せられる。大納言は、それと気がついて、「平氏(へいじ)が倒れました」と申された。法皇は思わず笑い出されて、「皆の者、ここに参って猿楽を仕れ」と仰せられたので、平判官康頼が、すっと立ち上がって、「ああ、あまりに平氏が多うござるによって酩酊いたした」と申し上げる。俊寛僧都が、「さて、その平氏をどう処置いたそう」と申すと、西光法師は、「ただ首をとるのが何より」と言って、（すかさず）瓶子(へいじ)の首を打ち欠いて席に戻る。浄憲法印はあまりの狂態に、あきれかえって、全く口もきけない。ただもう恐ろしい事だったのである [21]。

この鹿ケ谷の謀議の描写は、著者があたかもその場に居合わせたかのように大変リアルである。この場面は、慈円の「愚管抄」から取って、「平家物語」の著者が更に脚色したのではないかという説もある [22]。

瓶子(徳利)が倒れたのにかけて平氏が倒れたとの親爺ギャグに、法皇はじめ皆が笑い転げたのだという。不満を持った人間たちが集まり、酒の席で互いに思いの丈をぶちまけるなど、いつの時代にも普通に繰り返されてきたことだろう。酒を飲んで、上司の悪口を言って憂さ晴らしをするサラリーマンの姿を見かけるのは今日だってよくあることである。

物語は最後に、打倒平家と思っている人々の名を挙げ、北面の武士が多かったと述べている。清盛も鳥羽院に仕える北面の武士として父忠盛と共に活躍したのだから、やはり根底には跳びぬけて優秀であった仲間に対するやっかみがあったのだ。しかもその男は元々自分たちと同等であると思ってい

ただけに、嫉妬心もますます大きくなっていったのに違いない。肉親や親しい仲間同士の決裂は、得てして「骨肉の争い」ということになり易いものだ。

清盛と同年生まれ（1118 年）で、やはり北面の武士であった西行は 23 歳でさっさと出家し、鹿ケ谷事件（1177 年）の頃は、四国を行脚中であった。

註

(1) Das Nibelungenlied : Übersetzt von Felix Genzmer : RECLAMS UNIVERSAL-BIBLIOTHEK.Nr642. 1965. Stuttgart.
Da sprach der kühne Ritter: „Dem soll fürwahr Siegfids Hand wohl zu Euer Ehre nach Kräften widerstehn. Ich tu das den Degen, wie einst es schon geschehen: wüst will ich legen die Burgen und ihr Land. Daß ich davon nicht lasse, sie mein Haupt Euer Pfand. (Fünfzehntes Abenteuer : S.135)

(2) シェイクスピア「リチャード三世」。木下順二訳(第一幕第二場)。岩波書店。2002 年。

(3) 聖書。日本聖書協会。1955 年改訳。(士師記。第 16 章 15-16 節)

(4) ibid(3)。第 11 章 13 節

(5) ibid(3)。第 11 章 27 節

(6) 世界文学大系 1「ホメーロス」。呉茂一訳。筑摩書房。1961 年

(7) 呉茂一「ギリシャ神話」。新潮社。昭和 44 年。

(8) 山室静「ギリシャ神話」。社会思想社。昭和 38 年。

(9) ibid(7)

(10)ibid(7)

(11)マイケル・グラント、他「ギリシャ・ローマ神話事典」。西田実、他訳。大修館書店。1992 年

(12)井上光貞編集「日本書紀」〈日本の名著 1〉。中央公論社。昭和 58 年。

(13)ibid(12)

(14)三浦佑之注釈「古事記」。文芸春秋社。2002 年。

(15)ibid(14)

(16)山本健吉(訳者代表)「万葉集」(古事記・万葉集)。日本文学全集 1 。河出書房。昭和 43 年。

(17)ibid(14)

(18)ibid(14)

(19)ibid(12)

(20)水上勉「日本の風景を歩く　近江・大和」。河出書房新社。2000 年

(21)富倉徳次郎「平家物語全注釈」上巻。角川書店。昭和 41 年。

(22)ibid(21)